



TITLE:

はしがき

AUTHOR(S):

玉田, 芳史

CITATION:

玉田, 芳史. はしがき. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 11: 1-2

ISSUE DATE:

1996-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187525>

RIGHT:

は し が き

本報告書は、文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて」の研究項目 B01「外文明と内世界」のもとで、平成 5 年度と 6 年度の 2 年間にわたって行われた公募研究「東南アジアにおける国家形成の論理」(代表者 玉田芳史)の研究成果の一部をまとめたものである。この公募班の研究組織は、平成 5 年度は玉田芳史(京都大学)、赤木攻(大阪外国語大学)、村嶋英治(成蹊大学)、橋本卓(天理大学)からなり、平成 6 年度には池本幸生(京都大学)が新たに加わった。

この研究は、タイにおいて、19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけてのチャクリー改革期に近代国家がどのように形成されたのかを解明することを目的としていた。メンバー各自が個別に研究を進めつつ、平成 5 年度には 4 回、6 年度には 5 回の研究会を開いた。それぞれの研究会の概要は本重点領域研究総括班編集の『平成 5 年度の活動記録』ならびに『平成 6 年度の活動記録』をご覧いただきたい。

公募研究班のメンバー以外で研究会に出席し、貴重な意見を聞かせてもらった方々の名前を感謝の気持ちをこめて披露しておきたい。まず第 1 は、当時たまたま日本に滞在中であったタイ人の研究者である。ポーンペン・ハントラクーン(シンラパーコーン大学)、ソムポップ・マーナランサン、スワンナー・クリエンクライペット(ともにチュラーロンコーン大学)、アッタチャック・サッタヤーヌラック(チェンマイ大学)、プラスート・チッティワッタナポン(タマサート大学)らの各氏から貴重なコメントや報告をいただいた。第 2 は日本人の研究者である。韓国研究者の木村幹(愛媛大学)、マレーシア研究者の杉本均(京都大学)、タイ研究者の船津鶴代(アジア経済研究所)の 3 氏には、比較の視点を提示する有意義な報告をしていただいた。第 3 はタイ研究を行っている大学院生である。永井史男(京都大学大学院、当時)、宮田敏之(早稲田大学大学院、当時)、ウィエンラット・ネーティポー(京都大学大学院)の 3 氏にも興味深い報告をしてもらった。

チャクリー改革についてはすでにタイの内外においておびただしい数の研究が行われてきている。研究の動向を概観すれば、最初は政治行政面が着目され、やがて 1970 年代からは社会・経済面が重視されるようになり、その後総合的な理解を目指す方向へと向かってきているといえよう。従って、本研究は屋上屋を架すものではないかとの疑問を呈するむきもあろう。しかしながら、たとえばチャクリー改革とは何か、タイの近代国家形成の特色は何かといった基本的な問いかけに対する明確な解答はまだ存在しないのが実状である。近年なおチャクリー改革

期に関するモノグラフや論文が次々と出版されているのはこのために他ならない。本研究でも、研究会では毎回活発な討論が行われた。ここに寄せられた論考はそうした研究会での討論を踏まえたものである。

本報告書への寄稿者は、研究班メンバーから橋本(天理大学国際文化学部助教授)、玉田(京都大学東南アジア研究センター助教授)の2名、研究会で報告をした永井(京都大学東南アジア研究センター助手)、宮田(京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程在学、日本学術振興会特別研究員)の2名の合計4名である。橋本論文は、チャクリー改革のもっとも重要な部分とみなされる領域支配の確立過程について、従来の研究成果を踏まえつつ、考察を加えたものである。玉田論文はチャクリー改革期に生じた大きな変化の1つである王権の強化について、1892年から1932年にかけての時期の閣僚全員の氏名と経歴を洗い出すことにより検証し、王権強化が国家形成に与えた影響について考察している。永井論文はラーマ5世王の治世初期の改革を取り上げて、改革の契機がどこにあったのかを論じている。宮田論文は香港発行のディレクトリーから綿密にデータを選び出して整理することにより、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのタイにおける欧米企業の活動状況を描き出そうとしている。橋本と永井の論考は従来の研究成果を渉猟しつつ、新たな考察を加えたものである。他方、玉田と宮田の論文は従来活用されてこなかったデータを発掘するものであり、その意味で資料集的な意味合いも備えてる。いずれの論文も、チャクリー改革の総合的理解に至っているとはまだ言いがたいが、チャクリー改革やその時代のタイ社会に関する研究に大なり小なり寄与するものと思われる。

タイの近代国家形成やチャクリー改革に関する研究は、本報告書をもって終了するものでは決してない。本報告書はまだ第1歩を踏み出したにすぎない。研究メンバーならびに寄稿者は今後も引き続きこのテーマに取り組んでゆこうと考えている。本報告書に目を通していただいた方々から批判を賜れば幸いである。

なお、最後に、報告書の編集にあたって、編者が行ったのは、脚注や引用文献の一覧のスタイルの統一にとどまっている。このため、各論文ごとに、表現や表記などの不統一がみられることをお断りしておかねばならない。

1996年1月10日

編者